

その他の文書⑭

(比内文書『神様の御咄』続き。句読点、〈 〉内は筆者補)
 そこまで御艱難被下て、御付け被下たる道ハ、偏に皆我子の為、日々世界の子供が暗き道に這りて行くを、唯可愛との思召、此大御心ハ何共たといよいか御座りません。しまして、是迄信心した人達も一年に二度や三度ハ、そりや警察へこけ、巡查ニ」(34ウ) 追ひ立られ、種々の苦勞ハ教祖様とハ、余程軽き成れとも、度々て御座り舛た故、迎も叶わんと心変りしたり、又心得違て神様に叱られたりして、多くの信者も段々少なくなり、最早五六人程に世話方がなりましたそうよし。其中を通り抜け被下たる御方が、今なる本部員様六名じやさうよし。皆しんぼう仕兼て、段々と道が細道となりて、聞分ける人かなくなりました。夫故ニ教祖様見るに見兼ねて被下」(35オ)
 まして、ある寿命をちゝめて被下たのでありまし。是ハちよど、兵が弱くて大将討死とゆうような者や。依て御隠れ被下まして、戸扉を開いて御隠れ被下ましたなれと、教祖様御隠れの前に、仰せにハ身体ハなくなれと何処へも行きやせん。此処屋敷へ据へて、十分にふんばつてやろうと仰せて御座り舛た。依て教祖様ハ今も御存命で御座舛。外々を御巡回なされでハ御帰りなりして被下に至」(35ウ)
 りて道の為、我々の為に、十分御ふんばり被下るハ、如何なる事て御座りましよう。夫世界中の可愛子供が、日々あふなき道に入るを、高き尊き親様が見るに見兼ねて、教祖様の口を借りて万事御助け被下、道の道理を聞分けて、天の親様の御代理となり、唯世間の人間可愛への親心ハいちへ返も変らじ。如何な難儀も苦勞も、少しも御厭へなく、五十有余年の長の月日を唯一筋に御通り」(36オ)
 被下、又其上に五十五才の寿命迄、我々の通り安き為め、我々のごもくをかふつて、御隠れましへ。そうして、たとへなきから埋むとゆへとも、云バ魂魄今にとまりまして、蔭の御働き被下、大御心の御勿体なきやら難有やら、此心使をよう考へてごろうじませ。聞分けさして貰ねハなりませぬ事情で御座りましよう。聞分けさして貰うたら、其万分の一たり共、其御思に報ハねバ成りま」(36ウ)
 せん。其御思も酬じまするには、どうしたら報ぜられましようか。是をよう御思様被下ませ。取違へが出来では成りませぬ。教祖様ハ何も我身を人より尊とんて貰うの、何時迄も名を残して、朝夕に、人に御礼をゆいに来てもろうとゆう様な名利の御心は更になし。只人間助けたき一筋じや。其心の推し量りが出来たら、ととひ万分の一たり共、其使になり、其心のまねをたけなり共、使ふて貰ひ」(37オ)
 其通り残して被下なる雛形を、万分の一たり共踏み行ひさして貰ひましたら、万分の一の御思報じか出来まするのではありましまいか。教祖様ハ誠一筋て、唯人の助けたき、世界助けたき御心で、一日片時も御忘れ被下た事はないがつたそうよし。依而其心を安めるが第一。天の親様への孝行、第二ニ教祖様への御恩報じかと思わして貰ひ舛。そごて、教祖様が此御道を御付被下しは」(37ウ)
 何も学て御付被下たる道てハ御座りません。教祖様ハ学者てハ御座りません。そんなら無学とゆふても御座りません。なれとも深い学者とゆうでも御座りません。学問や人間の知恵や弁て

御付け被下たる道てハ御座りません。唯心の真実誠か天の親様の御心に叶ふた理と元とのいんねんの理とを、天の親様見しまして御降り被下、又教祖様ハ天の親様の仰せを真心に受」(38オ) けて雛形を残し被下、道ハ神様之御働き被下るのでありまし。依而、是迄上の力や人の力でとめよう、責さそうとしても、留り潰れもしませぬハ、是神様働ぎで御坐り舛。神様にハ深き思惑がありて、此度、世界の子供を助けねハならん。又、助けねバならんとゆふ道を、連れて通りたき御思召ニ依而、元々のいんねんとへを寄せて見済し被下、教祖様の御心か天の親様の御心に叶ふた其心味を見で、此」(38ウ)
 度、三千世界助けの雛形土台としてなし、天の親様にハ口か御座りません。夫故なんほ人間助けとしても、天に口なしとて論し事出来ませぬ。只人間に論しにハ水と火とをいて論しより外ハない。水と火とで論せば、只人間心に悟りか付いて、心がたんへ悪しきになるのみ。夫故又、神の残念あらわれる。神のざんねんあらわれれば、人間の心が悪くなる。悪しきに悪しきがそうじて暗き道に日々這入りて行く斗り。どうも」(39オ)
 ならん。夫故、此度日柄年限のくるのを待つ兼ねて、教祖様の身体を神の社と貰ひ受けに成つて、三千世界に、又となき人間助け一条の珍らしき道を、御達て被下ましたのでありまし。」(39ウ)

以上、「神様の御咄」を翻刻紹介してきた。その記述には、歴史的な時日等の間違いが若干見受けられるものの、その内容は、伝えるべきことがらが、丁寧に説かれている。秋田弁のままの音で表記されているところもあり、少しとまどうところもあったが、話としては分かりやすい。この後に、おさしづ書き下げの写しがあるが、それについては省略する。

比内文書の翻刻は、これで終わるが、こうした地方において、所蔵されている文書は、まだまだあるに違いない。ここまて、あえて本部や直属教会に所蔵される文書には触れようとしなかったが、それは、教理文書の伝播の様子を地方に求めたがゆえである。次に紹介しようとするのは、北海道にある高臺分教会(北陸大教会所属、雨竜郡沼田町旭町、北森邦幸会長)に所蔵されていたものである。

その文書は、「おふでさき」の写本(全十七号)、刻限おさしづ集(96件)、神心天降の由来などが、明治39年頃から大正にかけて筆写されている。ここで紹介するのは「御身の内話」と題されたものである。おそらく別席を運ぶについて関連したものであると思われる。内容が整っているところからすると、新しい(大正)時代のものかもしれない。

みのうちのはなし

わたくしの、しんじんいたしまするかみさまを、てんりおほかみさまと、もふしまして、くにとこたちのみことさまより、いざなぎ、いざなみのみことさまとて、とはしらのかみさまをそうめいして、てんりおほかみさまと、もふすのであります。いまでは、このからだを、わがものとおもふてをりましたが、いまかしてもらいますれば、このからだは、かみさまのもので、われへにんげんは、かりいたたておるのであります。○おんひとはしらは、くにとこたちのみこと」(1オ)

- と、もふしまして、てんにあつては、おつきさま。にんげんみのうちでは、めいど、うるういのごしゅごしてくださる、またせかいでは、みずいつさいを、おんつかさどりくださるゝ、かみさまであります。
- おんふたはしらを、をもたりのみことさまと、もふしまして、てんにあつては、おひいさま、にんげんみのうちでは、ぬくみのごしゅごしてくださる、またせかいでは、ひいつさいを、おんつかさどりくださるゝ、かみさまであります。
- いじよう、ふたはしらのかみさまは、せかい」(1ウ)
いでは、みずとひとのいちのかみさま、にんげんみのうちでは、すいき、ぬくみのいちのかみさまでありますから、このふたはしらのたいおんは、しばしも、わすれてはなりません。
- おんみはしらを、くにさつちのみことさまと、もふして、にんげんみのうちでは、かわつなぎの、ごしゅごしてくださる、またせかいでは、すべていつさい、つなくことを、をんつかさどりくださるゝ、かみさまであります。
- おんよはしらを、つきよみのみことさまと、もふして、にんげんみのうちでは、しん」(2オ)
なるほねの、ごしゅごしてくださるゝ、また、せかいでは、いつさいのものゝ、たちつばりを、おんつかさどりくださるゝかみさまであります。
- おんいつはしらを、くもよみのみことさまと、もふして、にんげんみのうちでは、のみくいでの、ごしゅごしてくださるゝ、また、せかいでは、みいのあげさげを、おんつかさどりくださるゝ、かみさまであります。
- いじよう、いつはしらのかみさまが、にんげんのかからだを、おんつくりくださる」(2ウ)
たによつて、ごりんごたいといふ。
- おんもはしらを、かしこねのみことさまと、もふして、にんげんみのうちでは、いきふきわけの、ごしゅごしてくださるゝ、また、せかいでは、かぜのふきわけを、おんつかさどりくださるかみさまであります。
- いじよう、もはしらのかみさまが、このからだを、もつにわけて、ごしゅごくださるゝによつて、むひよう、むつまじいといふ。
- おんなゝはしらを、たいしやくてんのみことさまと、もふして、にんげん、こをうむとき、おやこたいたいの、にくいんをきつて、くださ」(3オ)
るゝ、またせかいでは、きれものいつさいを、おんつかさどりくださるゝ、かみさまであります。
- おんやはしらを、おほとへののみことさまと、もふして、にんげん、こをうむとき、おやのたいないより、こをひきいだしくくださるゝ、せかいで、すべていつさいのものを、ひきいだし、ひきのばしてくださるゝ、かみさまであります。
- おんこゝのはしらを、いぎなぎのみことさまと、もふして、ないせかいや、ないにんげんを、おんつくりくださったとき、おとこひながたのたねと、おんなりくださった、かみ」(3ウ)
さまであります。
- おんとはしらを、いぎなみのみことさまと、もふして、ないせかいや、ないにんげんを、おんつくりくださったとき、お

- んなひながたの、なわしろと、おんなりくださった、かみさまであります。
- いじよう、とはしらのかみさまが、よるひる、ごしゅごしてくださるゝによつて、じうぶんといふ、このじうぶんの、せかいにすみながら、いろゝの、びよきや、なんきして、くるしむのは、にちゝこゝろの、つかいかたが、わるいゆへ、これをみちのおやさまは、やつ」(4オ)
ほこりにたとへて、おしめしくくださったのであります。
- ほしいと、もふしましても、わがくちや、あしきくせを、なをしてほしいと、いふこゝろは、よろしなれども、おなじほしいともふしても、じぶんはたらかずして、てまちゃんせんを、ほしいとおもふ、あしきこゝろが、ほこりとなる。また、
- おいしいと、もふしましても、わがからだを、むいきなところに、あそびつやすのが、おいしいといふこゝろは、よろしなれども、ひとのせわになつ」(4ウ)
ても、おれいするのが、おいしいとおもふ、あしきこゝろが、ほこりとなる。また、
- かわいと、もふしましても、わがみかわいければ、ひとをかわいかるこゝろが、わがみかわいのであります。なれども、おなじかわいと、もふしても、われさいよければ、ひとほどふでも、といふような、みがつてな、あしきこゝろが、ほこりとなる。また、
- にくいと、もふしましても、つみをにくんで、ひとをにくまぬといふこゝろは、よろし、なれども、おなじにくいと、もふしても、つみをにくまず、ひとをにくみ、かりものゝからだに、にち」(5オ)
ゝ、にくしみをかけて、くらす、あしきこゝろがほこりとなる。また、
- はらだちと、もふしまして、はらをたゝて、てんりにかのふということは、ありませんが、なれども、わがおやゝ、わがみに、かいなすもの、あるときは、ときとばやいにより、はらもたてね」(5ウ)
ばなりません。なれども、おなじはらだちと、もふしても、おやがためになることを、いふても、わがみのかつてのわるいことは、よしあしのきゝわけもせず、むやみにはらをたてる、あしきこゝろがほこりとなる。また、
- よくと、もふしましても、ひとなみのよくは、せねばなりません。なれども、ごうよくと、もふしまして、ますやはかりで、ひとのめを、くらすよふな、あしきこゝろがほこりとなる。また、
- こうまんと、もふしましても、わがみおぼいたことは、どふぞ、ひとにおしいてやりたと、おもふ」(6オ)
こゝろはよろし、なれとも、わがみをたかぶり、われよりみじくのものを、みくだすといふよふな、たかきこゝろがほこりとなる。
- このやつほこりは、われゝの、みやすきよふ、うらおもてにたとへて、おしめしくたされたのであるから、もし、このうらのこゝろを、つかうてきましたものあらば、そのこゝろをかみさまに、あやまりさへすれば、いかなるびやうきも、なをらんと、いふことはないのであります。

続いて、高臺分教会に所蔵されていた、品原やすの「御身内噺」を紹介しよう。その内容は、「御身の内話」と比べて、そう大差はないが、構成された文章は言葉足らずのところもあるが、自らの語り口で書かれているところに特徴がある。筆者は、高臺の部内である瀬戸牛分教会の初代会長夫人。娘時代より実家（高臺の親戚にあたる）の方でお道の話聞いていたようだ。

御身内噺

私、天理王命様の御はなし、聞いていただくまで、人間からだ、わがものと思て居りました。神様の御はなし、聞いていただいたら、このからだ神様より、かりものと聞いていただきました。神様わ、人間からだ、どうゆう御しごうくださると申すれば、御壺柱に、国とこ立の命様。人間身の内、めいどう、うろをいの御しごうくださる。せかいわ水の御しごうくださる神様で有まして、この人間もめいのすじやかにみゑたり、身の内水きちの、ぢゆんかんするのわ、国とこ立の命さまのかしもの、人わかりもので有ます。

御二柱に、面足の命様。人間身の内ぬくみの」(1オ)

御しごうくださる。せかいわ火の御しごうくださる神様で有まして、この人間身の内、あつもなし、つめとうもなし、人に人はだ、ほんぬりとぬくみ有のわ、面足の命様のかしもの、人わかりもので有ます。

御三柱にわ、国狭土の命様。人間身の内かわつなぎの御しごうくださる。せいわ金銭でつなぎ被下、親子中わ、ぎりでつなぎ、ふうふのあいわ、ゑんでつなぎ、女子うめば、あとらはつなぎ、すべてつなぐ壺さいの神様で有ます。

御四柱に月夜見の命様。人間身の内、しんとなるほねの御しごうくださる。せかいわ、木かやそう木、よろずたちの壺さい、たちつうばの御しごうくださる神様」(1ウ)

で有まして、この人間も、あるくことも、たつことも、をもしもの、もちはこぶことでけるわ、月夜見の命様の御しごうで有ます。

御五柱に、雲読の命様。人間身の内、のみくいでいりの御しごうくださる。せかいわ、雨つよあげさげの御しごうくださる神様で有まして、この人間も、のんだりたべたりして、をしいと思、あじわいわにきたいとなり、あまりたかすニべんにつうじくださるわ、くもよみの命様の御しごうで有ます。

御六柱に、か시코ねの命様。人間身の内、いきふきわけの御しごうくださる。せかいわ、風壺さいの」(2オ)

御しごうくださる。この人間も、みみでききわけ、はなでかきわけ、口でものゆうことでけるわ、か시코ねの命様の御しごうで有ます。

七柱に、大食天の命様。人間うまれる時、親のたいない、ゑんをきりてくださる。せかいわ、よろず種ものの、たねはら、きりてくださる神様で有ます。

八柱に、大斗辺の命様。人間うまれる時、親のたいないより、子ひきだしてくださる。せかいわ、種ものの、しんめひきだしの御しごうくださる神であります。

九柱に、伊諾の命様。本々ないせかいに、人間御つくりくださる時、男ひながた、たねと御なりくださった神様で有ります。」(2ウ)

拾柱に、伊ざなみの命様。本々ないせかいに、人間御つくりくださる時、女ひながた、なわしろと御なりくださった神様で有ります。

これで御十柱の神様。この十柱の神様をそうめして、天理王命様と申すので御ざいます。この天理王命が、人間身の内、せかい中壺さい、できたち有もの御しごうくださるので御ざいます。この十分のせかいにすみなから、からだのいたみ、なやみ、なんぎふしゆう、うれしいなん、火なんとうなんにををて、くるしむのわ、みな前生から今日まで、人間心ちかいは本で有と、教祖様より御しめし」(3オ)

くださる有ます。この八つのなんを、八つのほこりにたとへて、はなしすると御しめしきと申す有ます。そのほこりと申すわ、ほしい、をしい、かわい、にくい、うらみ、はらたち、よく、こうまん、この八つの心、うちの心、十分につつしんで、とをらねばなりません。ほしいと申ても、わが心のあしきくせ、ぐちなをしてほしいとか、家内一度〈一同〉中善くらさしてほしいとか、せかい人わぢれつ兄弟ゆゑ、人たすけになること、たすけさしてほしい心わ、理で有ます。なれども、ほしいと申ても、吾身はたらかすに、人のもうけた金銭ほしいとか、あたいださずに、人の品ものほしいとか、男なれば、によぼありても、によぼりゑんしてでも、よきによぼほしいとか、女なれば、有ていしゆ、りゑんしてでも、よきていしゆ、ほしい心わ、」(3ウ)

天理にかなわん悪きほこりで有ます。

をしいと申ても、わがからだを、むるきの所へあすびつやすのがをしいとか、金銭さいほむるきに、つかいはたすのを、をしいとか、米櫃けやさいの物、なのは壺まいにいたるまで、そまつになるのを、をしい心わ理で有ます。なれども、をしいと申ても、人にかりたもの、人にせわになりても、へんれいをしいとか、親又わ国の為、神様の為に、しんじつの心からつくすこを、をしい心わ、悪きほこりであります。

にくいと申ても、つみをにくんで人をにくます、つみたること、ゆうたりしたりする人有時にわ、其人の心になれようて、とりなをし、さとすわ理で有ます。」(4オ)

にくいとゆても、つみをにくまず、人をにくんで、あの人、あゝもしたとか、こうもゆうたとか、善きこもさとさず、人をにくんでくらすわ、悪きほこりであります。

うらみと申ても、悪きことできわいた時に、なにもゑんねんないことできわくことと思、吾前生うらんでくらすわ理で有ます。なれども、うらみと申ても吾身うらます、人をうらんで悪ことできわいた時にわ、あの人わがで、こまつたとか、又あの人こうもしてくれそなものやとか、あもゆうてくれそなとか、又、人のしよばいほんじを、うらんで、人のしゆつせをうらんでくらすわ、悪きほこりで有ます。」(4ウ)

はらたちと申ても、はらたてて天理にかなうとゆうこと有ません。なれども、親が善きことゆうてくれても、人が善きことゆうてくれて、吾きにすかんとすれば、はらたててくらすわ、悪きほこりて有ます。(以下略)